様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：８７１１１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２８８１

研究課題名（和文）狩野派の地方展開黎明期の実態についての研究ー福岡藩御抱え絵師・尾形家を中心にー

研究課題名（英文）A study on the early stage of the local expansion of the Kano school - Focusing on the Ogata family, the painters employed by the Fukuoka domain

研究代表者
日野　綾子（Hino, Ayako）

九州歴史資料館・文化財企画推進室・研究員（移行）

研究者番号：２０８０３３１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：近世の狩野派は、活動の拠点であった江戸のみならず、全国各地にその画法を広めた日本絵画史上最大の流派である。その地方展開のために大きな役割を担ったのが、諸藩に召し抱えられた狩野派の御抱え絵師であった。本研究では、福岡藩の御抱え絵師として活躍した尾形家のうち、17～18世紀にかけて活動した初代仲由、第二代守義、第三代守房を取り上げた。この三代は、江戸で狩野探幽に学び、その画風を筑前の地で広めた絵師として重要である。研究期間中には、三代の制作した作品および画稿について悉皆的に調査を実施し、三代それぞれの画風の特徴や、探幽の絵画様式の学習の痕跡について、具体的に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
狩野派については、奥絵師、表絵師などの流派の中心で活躍した絵師の研究が最も進んでおり、地方で活躍し画法の全国的な展開に大きな役割を担った絵師については、十分に研究が進んでいないのが現状である。本研究では、地方で活躍した狩野派御抱え絵師である尾形家に焦点を当て、作品と画稿に基づき、その画業を具体的に明らかにした点に学術的意義がある。
また、今回取り上げた尾形家の初代～第三代は、その画技の高さにも関わらず地域での知名度が低い絵師であった。本研究の成果を展覧会や報告書により発信したことで、地域の方々にその存在の重要性や面白さを示すことができた点には、社会的意義を見出せる。

研究成果の概要（英文）：The early modern Kano school is the largest school of painting in the history of Japanese painting, spreading its painting style not only in Edo, where it was based, but throughout the country. The Kano school's official painters, employed by various feudal domains, played a major role in the local expansion of the school. In this study, we focus on the first Chu-yu, the second Moriyoshi, and the third Morifusa, who were active in the 17th and 18th centuries among the Ogata family, who were active as official painters in the Fukuoka domain. These three generations are important as painters who studied under Kano Tan'yu in Edo and spread his style in Chikuzen. During the research period, we conducted a comprehensive survey of the works and sketches produced by the three generations, and were able to concretely clarify the characteristics of each generation's style and traces of their learning of Tan'yu's painting style.

研究分野：近世絵画史

キーワード：近世絵画史　狩野派　福岡藩　御抱え絵師　画稿　粉本　尾形家　狩野探幽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

江戸時代の狩野派は、江戸を活動の拠点とし、幕府の御用を務める奥絵師、それを支える表絵師、さらにそれぞれの家で学んだ多くの門弟によって、血縁と師弟関係に基づく流派の体制を確立した。全国諸藩の大名は、江戸の狩野家の絵師を召し抱えたり、自藩の御抱え絵師を江戸に派遣し狩野家で学ばせたのち、自藩の画事に取り組ませたりした。結果として狩野派の画法は日本各地に広まり、江戸時代最大の流派として近世絵画史において大きな役割を担った。

しかしながら、その研究史に目を移したとき、狩野派研究においては江戸の奥絵師や表絵師という、いわば狩野派の中枢で活躍した絵師の比重が大きく、狩野派を学び地方の藩に仕えた絵師についてはあまり研究が進んでいないのが現状である。このことは、狩野派研究において看過できない地方展開の問題が等閑視されてきたということでもある。

２．研究の目的

本研究では、福岡藩の御抱え絵師であり狩野派を学んだ尾形家を取り上げる。尾形家の絵師は、筑前にありながら、折々に江戸の鍛冶橋狩野家や駿河台狩野家に入門し絵を学ぶなど、江戸狩野派とのつながりが強くあった。また、尾形家には 4791 点にも及ぶ画稿類（絵手本、下書き等）が現存しており、これは狩野派の画法が江戸から地方にどのように伝播したかを具体的に解明するうえで極めて重要といえる。尾形家についての主な先行研究には、『尾形家絵画資料　図版・目録』（西日本文化協会、1986 年）や、小林法子『筑前御抱え絵師　研究篇・史料篇』（中央公論美術出版、2004 年）がある。前者においては福岡県立美術館の所蔵する尾形家絵画資料（画稿類）の網羅的な目録化がなされ、後者においては緻密な文献調査を元に筑前御抱え絵師に関わる基礎資料が集成された。これらの研究は福岡の御抱え絵師研究の基盤をつくり、また地方の御抱え絵師研究としては全国的に見ても先駆けとなるようなものといえる。

これらの資料や研究成果を総合した上で、これまで検討がほとんどなされていなかった個々の絵師の画風や画業について解明し、ひいては狩野派の地方展開の様相について具体的に明らかにすることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

狩野派の地方展開確立の黎明期に活動した、尾形家の初代小方仲由、第二代小方守義、第三代小方守房を中心に、作品と画稿類の悉皆的な調査を実施する。この三代はみな狩野探幽の門人であり、尾形家の御抱え絵師としての基盤の確立に寄与した重要な人物たちである。彼らの作品と画稿類の基礎的データを集積し、その内容を比較検討することにより、尾形家の絵師たちの江戸での修学の実態と、狩野派の地方展開黎明期の一様相の解明を試みる。

４．研究成果

研究期間中には、作品計 33 件（仲由 5 件、守義 2 件、守房 26 件）と、画稿類計 384 件の調査を行った。これらについては、企画展「尾形家三代―探幽に学んだ福岡藩御抱え絵師―」（九州歴史資料館、2023 年）の図録および、本研究の成果報告書（九州歴史資料館、2024 年）において、画像と基礎データを公開した。

作品については、三代いずれにおいても、師である探幽の画風を色濃く継承していることが確認された。ただ、師の画風をもととしながらも、それぞれの画風には個々の個性も垣間見えた。特に守房については、多様な様式の作品が残されており、探幽に限らず、和漢の絵師の古画の写しによる修学が制作の大きな基盤となっていることが想定される。画稿類と直接的に結びつく作品は意外にも少なかったが、そうした画稿類はすでに失われたか、あるいは蓄えた画稿類からエッセンスを抽出し、別の個性をもつ自身の作品に昇華させる制作の方法を用いたためと捉えることもできる。

画稿類については、特に守義と守房において、若年期の修学のみならず、人生を通して折に触れ制作が続けられているようである。なかでも探幽のもとでの修学期に写されたとみられる画稿類の数が多いのは特徴的である。今回調査した 384 件の画稿類のうち、探幽画の模本は 52 件見られた。これは画稿中に明記されているものを抽出した数であり、探幽作品との近似性を感じさせる画稿類はこれら以外にも多くあったため、初代～第三代が探幽の強い影響下で修学を行っていたことを感じさせる。

さらに、福岡藩の第三代藩主黒田光之の肖像画や、第四代藩主黒田綱政の命によって制作された大江山絵巻について、守房が下絵を描くなどの実質的な下働きをし、江戸の狩野派の絵師が完成作品を描くという、藩の御抱え絵師と江戸の狩野家の流派内での立場の違いが明確に見える作例を確認することができた。藩主や家臣らは、こうした狩野派内の体制を理解し、江戸の狩野家と藩の御抱え絵師を場合により使い分けていたとみられる。このことは、探幽が江戸幕府の御抱え絵師となって以降、安信が継いだ宗家中橋家を頂点とし、江戸の奥絵師、表絵師を中心に全国各地にまで展開していた狩野派の体制や序列が、18 世紀前半には十分に流派内や雇用主である武家にも浸透し、成立を迎えていていたことを示唆している。

しかしながら、絵画表現を比較してみると、仲由、守義、守房の画技は、決して江戸狩野派の絵師たちに劣るものではないことも、この度の作品と画稿類の調査において再認識された。狩野派の教育システム上、奥絵師のもとで修業した藩の御抱え絵師は、数の多寡はあろうが、質的には奥絵師と同等の画稿類をもとに、各地で制作を行うことができたはずである。同じような修学背景やそれに基づく図像データベースをもつと考えれば、むしろ奥絵師も地方の絵師も、フラットな視点から純粋に画技のみを比較し評価することが可能であろう。今後、江戸狩野派のみならず各地の絵師についても個別の作品・画稿類の研究をより深め、個々の絵師の技量を正しく評価し顕彰していくことで、狩野派の全体像をさらに具体的に明らかにすることにつながると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 日野綾子	４．巻 47
２．論文標題 小方仁兵衛筆「三十六歌仙図」画稿―尾形家絵画資料と作品制作の関わり―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 九州歴史資料館研究論集	６．最初と最後の頁 107‐123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日野綾子、小林知美、井形栄子	４．巻 31
２．論文標題 福岡藩御抱え絵師の研究（二）　尾形家絵画資料　小方喜六写「大江山絵巻」画稿	５．発行年 2020年
３．雑誌名 筑紫女学園大学人間文化研究所年報	６．最初と最後の頁 45-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日野綾子	４．巻 -
２．論文標題 唐絵手鑑「筆耕園」にみる中国絵画受容	５．発行年 2020年
３．雑誌名 特別展「福岡の至宝に見る信仰と美」図録（九州歴史資料館）	６．最初と最後の頁 110,111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日野綾子	４．巻 46
２．論文標題 新出の個人蔵「守昌」印屏風について―衣笠守昌作品としての位置づけ―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 九州歴史資料館研究論集	６．最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 日野綾子	４．発行年 2023年
２．出版社 九州歴史資料館	５．総ページ数 92
３．書名 尾形家三代―探幽に学んだ福岡藩御抱え絵師―	

１．著者名 日野綾子	４．発行年 2024年
２．出版社 九州歴史資料館	５．総ページ数 224
３．書名 狩野派の地方展開黎明期の実態についての研究ー福岡藩御抱え絵師・尾形家を中心にー（研究成果報告書）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

九州歴史資料館第66回企画展「尾形家三代―探幽に学んだ福岡藩御抱え絵師―」（令和5年〔2023〕1月18日～3月12日）において、調査成果をもとに展示を行った。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関